第２期中期目標期間に係る業務の実績に関する評価結果
国立大学法人千葉大学

１ 全体評価

千葉大学は、「つねに、より高きものをめざして」という理念の下、世界を先導する創造的な教育・研究活動を通しての社会貢献を使命としている。第２期中期目標期間においては、総合的で高度な個性ある教育プログラムと最善の環境の提供による有為な人材の育成や世界的な研究拠点を育成し、基礎研究から応用研究までを自由な発想に基づき重層的に推進すること等を目標としている。

中期目標期間の業務の実績の状況は、すべての項目で中期目標の達成状況が「良好」又は「おおむね良好」である。業務実績のうち、主な特記事項は以下のとおりである。

（教育研究等の質の向上）

学部を超えた横断型の教育プログラム「国際日本学」において、留学までのロードマップを提示するとともに、海外経験のない学生を対象に、英語のスピーキング力の向上と文化体験を組み合わせたBOOTプログラムや協定校の学生と英語で議論しながら課題解決法を提案するグローバル・スタディ・プログラム等、複数の海外派遣プログラムを実施している。また、国際的に優れた先駆的・学際的プロジェクトを推進するため、千葉大学COEスタートアッププログラム、千葉大学次世代研究育成プログラム、千葉大学COEプログラム等の学内研究支援事業により、若手の研究者及びグループを支援している。これらの取組により、ハドロン宇宙科学分野等の国際的な研究グループやキラリティー物質科学分野等の複数の研究科を横断した学際的研究グループを創成しており、ハドロン宇宙科学分野においては高エネルギー宇宙ニュートリノの世界初の検出に成功している。

（業務運営・財務内容等）

「千葉大学のビジョン」及び学長の基本方針である「TOKUHISA PLAN」を策定するとともに、大学が直面する課題ごとに担当副学長を配置し、学長の全学的なリーダーシップを強化している。また、大学にゆかりのある各界の著名人や卒業生を通じて、大学の魅力を広く発信することでイメージアップを図るために、「千葉大学ジェネラルサポーター制度」を創設し、地域、官公庁等での講演等において大学のPR及び支援の促進を図っている。この他、学生が実務実習という形で大学の環境マネジメントに参画し主体的に活動しており、学生委員会がNPO法人化されるなど、その活動の幅を地域にまで広げている。

一方で、業務運営の改善及び効率化に関する１事項について、中期計画を十分には実施していないと認められる。また、過年度評価において複数回指摘された事項があったことから、改善に向けた取組が求められる。

（「戦略性が高く意欲的な目標・計画」の取組状況について）

別紙のとおり。

２ 項目別評価

Ⅰ．教育研究等の質の向上の状況

＜評価結果の概況＞

	非常に優れている	良　好	おおむね良好	不十分	重大な改善事項
（Ⅰ）教育に関する目標			○		
①教育内容及び教育の成果等			○		
②教育の実施体制等			○		
③学生への支援		○			
（Ⅱ）研究に関する目標		○			
①研究水準及び研究の成果等		○			
②研究実施体制等		○			
（Ⅲ）社会連携・社会貢献、国際化等に関する目標		○			
①地域を志向した教育・研究		○			
②社会との連携や社会貢献		○			
③国際化		○			

（Ⅰ）教育に関する目標

１．評価結果及び判断理由

【評価結果】中期目標の達成状況がおおむね良好である

（判断理由）　「教育に関する目標」に関する中期目標（３項目）のうち、１項目が「良好」、２項目が「おおむね良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

２．各中期目標の達成状況

①教育内容及び教育の成果等に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況がおおむね良好である

（判断理由）　「教育内容及び教育の成果等に関する目標」の下に定められている具体的な目標（５項目）のうち、１項目が「良好」、４項目が「おおむね良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。なお、「おおむね良好」と判定した４項目のうち１項目は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定された１計画を含む。

＜特記すべき点＞

（優れた点）

○ 学部を超えた横断型の教育プログラムの構築

文部科学省のスーパーグローバル大学創成支援や大学の世界展開力強化事業等に６件のプログラムが採択されており、このうちスキップワイズ・プログラムでは、学部を超えた横断型の教育プログラム「国際日本学」を構築し、外国語と外国文化への理解の涵養と外国語コミュニケーション能力を養成する機会を設けている。これらの取組により、日本学生支援機構の協定等に基づく日本人学生留学状況調査において、学生海外派遣数は、全国の国立大学の中で平成23年度から４年連続１位となっている。

○ 医学部におけるカリキュラム編成の見直し

医学部において、学習成果基盤型教育（OBE）の導入により、パフォーマンス・レベルの設定に伴うカリキュラム編成の見直しと、科目のナンバリング導入及びカリキュラム・ツリーの作成を行っている。また、学習成果の評価方法の改善として、web-based test、e-portfolioの導入を行い、到達目標を達成するための学習支援ではシミュレーション教育の拡充を行っている。

○ 医学部におけるコミュニケーション能力の向上への取組

医学部において、６年一貫医学英語教育の導入や、専門職連携教育（IPE）等によるプロフェッショナリズム教育の拡充により、コミュニケーション能力の向上に取り組んでいる。

（特色ある点）

○ 飛び入学制度における選抜方法の工夫

飛び入学制度（先進科学プログラム）では、特定の分野において優れた能力や資質を持つ者を選抜するため、面接や課題論述に試験時間をかけ、受験者の適性を的確に把握できるよう選抜方法を工夫している。また、秋飛び入学、秋入学を実施するとともに、早期卒業導入の学部を２学部から５学部に増加している。さらに、平成26年度に文部科学省の大学教育再生加速プログラムに採択された「次世代スキップアップ・プログラム」において、県内の高等学校・教育委員会とコンソーシアムを構築し、高校生を対象に早期から高度な科学体験・教育を実施することにより、大学のグローバルな教育・研究拠点としての機能向上を目指している。

○ アカデミック・リンク・センターの設置

平成23年度にアカデミック・リンク・センターを設置し、議論や発表のできる空間のアクティブ・ラーニング・スペース、学生の学びへの人的サポートのティーチング・ハブ、紙や電子媒体による教材のコンテンツ・ラボを整備することにより、すべての学部・研究科（学府）でアクティブ・ラーニングを取り入れた授業を実施している。これらの取組により、学生アンケートでは、１日の授業外学習時間が３時間以上と答えた学生が平成20年度の7.2％から平成24年度の11.6％へ増加している。また、セミナーやファカルティ・ディベロップメント（FD）等の実績により、アカデミック・リンク・センターは平成27年度に文部科学省の教育関係共同利用拠点に認定されている。

②教育の実施体制等に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況がおおむね良好である

（判断理由）　「教育の実施体制等に関する目標」の下に定められている具体的な目標（３項目）のうち、１項目が「良好」、２項目が「おおむね良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

＜特記すべき点＞

（優れた点）

○ グローバル化推進環境の整備

グローバル化の推進、学生支援機能の強化のため、平成24年度に総合学生支援センターにイングリッシュ・ハウスを設置しており、英語のネイティブスピーカー教員とスチューデント・アシスタントが常駐し、各種イベントを開催している。施設利用者は平成25年度の約１万名から平成27年度の約３万名へ増加している。また、留学生との交流も含めたグローバルな共同学習の場としてグローバル・アクティブ・ラーニングスペースを整備している。

○ 全学的教育改革方針の策定

学長のリーダーシップの下、全学的な教育改革を推進するため、重点的事項を掲げた千葉大学の教育改革の方針2013を策定し、全学の点検・評価の実施組織として運営基盤機構大学評価部門を、教学マネジメントを確立することを目的として高等研究教育機構を設置し、全学的教育活動のPDCAサイクルを構築している。

③学生への支援に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である

（判断理由）　「学生への支援に関する目標」の下に定められている具体的な目標（３項目）のうち、２項目が「良好」、１項目が「おおむね良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

＜特記すべき点＞

（優れた点）

○ 学生の海外派遣の推進

平成24年度の文部科学省グローバル人材育成推進事業にスキップワイズ･プログラム、平成26年度のスーパーグローバル大学創成支援にグローバル千葉大学の新生－Rising Chiba University－が採択されている。その一環として学部を超えた横断型の教育プログラム「国際日本学」において、留学までのロードマップを提示するとともに、海外経験のない学生を対象に、英語のスピーキング力の向上と文化体験を組み合わせたBOOTプログラムや協定校の学生と英語で議論しながら課題解決法を提案するグローバル・スタディ・プログラム等、複数の海外派遣プログラムを実施している。これらの取組により、日本学生支援機構の協定等に基づく日本人学生留学状況調査において、学生海外派遣数は、全国の国立大学の中で平成23年度から４年連続１位となっている。

○ 学生主体による環境活動の推進

環境ISO学生委員会の主体的活動により、環境マネジメントシステム（ISO14001）及びエネルギーマネジメントシステム（ISO50001）の認証を取得しており、これらの活動を教養展開科目群の千葉大学の環境をつくるのうち、企業や官公庁へのインターンシップを含む「環境マネジメントシステム実習１～３」として単位化することにより、学生主体の活動を支援している。

（Ⅱ）研究に関する目標

１．評価結果及び判断理由

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である
（判断理由）　「研究に関する目標」に関する中期目標（２項目）のすべてが「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

２．各中期目標の達成状況

① 研究水準及び研究の成果等に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である
（判断理由）　「研究水準及び研究の成果等に関する目標」の下に定められている具体的な目標（１項目）が「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

＜特記すべき点＞
（優れた点）

○ 卓越した研究拠点形成の推進

平成20年度に文部科学省のグローバルCOEプログラムに２拠点が採択され、全学的支援の下、発展させている。医学分野の「免疫システム統御治療学の国際教育研究拠点」では、がんの免疫細胞治療の高度先進医療としての承認等により、平成24年度に文部科学省の博士課程教育リーディングプログラム及び国立大学改革強化推進事業に採択されている。また、物理学分野の「有機エレクトロニクス高度化スクール」では、光のキラリティーを用いた有機物質の制御による可能性を示すなどの実績により、平成27年度に融合科学研究科附属分子キラリティー研究センターを設置している。そのほか、第２期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）に高エネルギー宇宙ニュートリノの世界初の検出に成功したハドロン宇宙科学分野等においても世界トップクラスの研究拠点形成を目指している。

○ 理学部・理学研究科における研究成果による各賞の受賞

理学部・理学研究科において、解析学基礎の「C*環への群作用の分類理論の研究」では、日本数学会解析学賞及び作用素環賞を受賞している。

○ 理学部・理学研究科における研究成果による各賞の受賞

理学部・理学研究科において、素粒子・原子核・宇宙線・宇宙物理の「宇宙ニュートリノの発見と超高エネルギー宇宙の起源」では、最高エネルギーニュートリノの世界初の観測に成功し、戸塚賞を受賞している。

○ 理学部・理学研究科における研究の推進

理学部・理学研究科において、機能生物化学の「筋原線維のアクチン線維形成の分子機構の解明」では、筋原線維のアクチン線維が作られる分子的な機構を初めて解明し、社会的にインパクトが大きい成果をあげている。

○ 看護学部・看護学研究科における若手研究者による研究の推進

看護学部・看護学研究科において、発表論文数は、平成22年度の560件から平成27年度の598件へ、国際学術誌での採択論文数は、平成21年度の２件から平成27年度の20件へそれぞれ増加している。特に准教授・講師及び助教の研究論文発表数は、平成22年度の225件から平成27年度の322件へ増加している。

○ 看護学部・看護学研究科における研究成果の活用

看護学部・看護学研究科において、「日本の高年初産婦に特化した子育て支援ガイドラインの開発」、「高度生殖医療を受けた妊婦の母親役割獲得を促す看護介入プログラムの開発と実用化」、「看護実践・教育のための評価システムの開発」等、国内外で研究成果が活用されている。

②研究実施体制等に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である

（判断理由）　「研究実施体制等に関する目標」の下に定められている具体的な目標（１項目）が「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

＜特記すべき点＞

（優れた点）

○ 国際的に優れた先駆的・学際的プロジェクトへの支援の充実

国際的に優れた先駆的・学際的プロジェクトを推進するため、千葉大学COEスタートアッププログラム、千葉大学次世代研究育成プログラム、千葉大学COEプログラム等の学内研究支援事業により、若手の研究者及びグループを支援している。これらの事業を検証し、平成27年度から大学の強み・特色となる分野の研究力を強化し、国際的卓越拠点形成を目的とする戦略的重点研究強化プログラム、次世代の研究の核となるグループを育成するリーディング研究育成プログラムに移行することにより、ハドロン宇宙科学分野等の国際的な研究グループやキラリティー物質科学分野等の複数の研究科を横断した学際的研究グループが創成されている。これらの取組により、高エネルギー宇宙ニュートリノの世界初の検出に成功するなどの成果がある。

（特色ある点）

○ 共同利用・共同研究の推進

共同利用・共同研究拠点である環境リモートセンシング研究センター及び真菌医学研究センターにおいて、第２期中期目標期間に計408件の共同利用・共同研究を実施している。環境リモートセンシング研究センターでは、気象庁より提供されたひまわり８号の衛星データを公開しているほか、真菌医学研究センターでは、京都大学ウィルス研究所との共同研究により、感染に応答した自然免疫誘導において、ストレス顆粒と呼ばれる細胞内偽集体の形成が重要な役割を担うことを世界で初めて明らかにするなどの成果がある。

（Ⅲ）その他の目標

（１）社会連携・社会貢献、国際化等に関する目標

１．評価結果及び判断理由

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である
（判断理由）　「その他の目標」に関する中期目標（３項目）のすべてが「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

２．各中期目標の達成状況

①地域を志向した教育・研究に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である
（判断理由）　「地域を志向した教育・研究に関する目標」の下に定められている具体的な目標（１項目）が「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

＜特記すべき点＞
（特色ある点）
○ 自治体・NPO等との連携による廃校を活用した地域研究拠点の運営

平成25年度に文部科学省の地（知）の拠点整備事業（COC）に「クリエィティブ・コミュニティ創成拠点・千葉大学」が採択され、コミュニティ再生・ケアセンターを中心に自治体・NPO等と連携の下、郊外型廃校を活用したサテライトキャンパス美浜を市民・教員・学生が連携する地域研究拠点として、地域の課題解決や活性化等の研究推進計画を立案、実施している。また、平成27年度から全学共通プログラム「コミュニティ再生ケア学」を実施し、地域・コミュニティに関する教養と地域再生の知識、実践力を備え、地域に貢献する人材育成を図っている。

②社会との連携や社会貢献に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である
（判断理由）　「社会との連携や社会貢献に関する目標」の下に定められている具体的な目標（１項目）が「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

③国際化に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である
（判断理由）　「国際化に関する目標」の下に定められている具体的な目標（２項目）のすべてが「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。なお、「良好」と判定した２項目のうち１項目は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定された１計画を含む。

＜特記すべき点＞
（優れた点）
○ 留学生支援の拡充
平成22年度に留学生に対するワンストップサービスを実現するインターナショナル・サポートデスク（ISD）を設置しているほか、留学生に対し、グローバル教育プログラムによる学生の受入、レベル別日本語教育等の各種取組により、平成27年度に日本留学アワーズの東日本地区国公立大学部門賞を受賞している。
○ スーパーグローバル大学創成支援事業の推進
平成26年度のスーパーグローバル大学創成支援の採択により、千葉大学が参画している国立六大学連携コンソーシアム国際連携機構ではASEAN大学ネットワーク（AUN）と包括交流協定を締結し、大学連合間で交流している。さらに、日本人学生と留学生の共同学習プログラム「グローバル・スタディ・プログラム」として新たに２つのプログラムを開発するなどの取組により、日本学生支援機構の協定等に基づく日本人学生留学状況調査において、学生海外派遣数は、全国の国立大学の中で平成23年度から４年連続１位となっている。

（２）附属病院に関する目標
千葉県や医師会、県内外の研修関連病院との連携を強化し、臨床研修の充実を図っている。また、がん治療に係る領域横断的・先端的な人材養成と研究体制の確立に取り組んでいる。診療面では、周産期医療における集学的診療体制を整備し、致命率の高い3.5次救急患者の常時無条件受入れを行うなど、地域の母体救命率の向上に貢献しているほか、自治体や医師会と連携して、超高齢社会における医療提供体制の構築を進めている。

＜特記すべき点＞
（優れた点）
（教育・研究面）
○ 臨床指導体制の強化等に向けた取組
平成23年度に総合医療教育研修センターに研修プログラムの内容や教育活動等の評価を行う評価部門を設置し専任の担当者を配置したことにより、長期的かつ継続的な評価を実施する体制を整備しているほか、教育専任教員（アテンディング）を配置し、学生及び研修医に対する臨床指導を強化している。
○ 臨床腫瘍学講座開設による臨床・橋渡し研究人材の養成及び研究体制の確立
平成24年度に、腫瘍内科・放射線科・緩和医療科・歯科・看護・薬学の教員から構成される包括的な「臨床腫瘍学講座」を新たに設置し、領域横断的・先端的がん薬物療法の臨床・橋渡し研究人材養成と研究体制確立に取り組んでいる。同講座において、第２期中期目標期間に105名のがんチーム医療専門人材を養成したほか、多職種横断的共同研究を進め、抗がん薬投与における血管外漏出の問題等の研究成果を上げている。

（診療面）

○ 周産期医療における3.5次救急患者の受入体制の構築

逼迫した周産期医療の状況の改善に向けて、院内での集学的診療体制（産科危機的出血に対するアクションコード、緊急帝王切開グレード化等）を整備することで母体救命率を高めている。また、当該診療体制を平成25年度から地域医療に開放して、地域全体で母体救命率を高める活動（地域さんかプロジェクトZero）を展開し、母体救急のうち特に致命率の高い3.5次救急患者を、附属病院が常時無条件かつ迅速に受け入れる体制を構築・維持している。

○ 地域における認知症治療拠点の構築に向けた取組

高齢者の増加に伴う「認知症」への対策及び地域の認知症診療中核施設機能を強化するため、平成24年度に「認知症疾患医療センター」を設置し、千葉市・千葉市医師会を構成員とした認知症疾患医療センター推進会議を開催して、超高齢社会で増加が予想される認知症の治療拠点の構築と地域ネットワークの形成を目指した協議を実施している。協議結果を踏まえ、多職種による認知症ケース相談会を千葉市と連携して開催すること等の取組の結果、同センターの外来患者数は平成24年度の523名から平成27年度には857名に、電話・面談相談件数は平成24年度の383件から平成27年度には839件に増加している。

（運営面）

○ 医療の国際展開の推進

平成26年度に国際医療センターを設置し、海外からの患者の受入れ（平成26年度～27年度3名）、海外の医学教育の支援、海外医療機関への職員派遣（同期間53名）等の国際的な取組を支援している。また、ロシア国民経済行政学アカデミー（ロシア）から医療機関の病院長・副病院長ら20名の視察受入れを行うなど、医療の国際展開を推進している。

○ 地域と連携した超高齢社会における医療提供体制の構築

超高齢社会を迎えるに当たり、医療政策を分析し、実現可能な医療政策を提言することを目的とした「千葉県寄附研究部門 高齢社会医療政策研究部」を、平成24年度に千葉県と連携して設置し、首都圏における高齢者人口の増加とそれに対応した医療提供体制の在り方についての研究成果をまとめ、必要な医療政策についての提言を行っている。さらに、効率的医療提供体制の構築を目的とした「千葉県地域連携の会」を毎年開催し、毎回300名を超える県内医療関係者が参加して活発に意見交換を行うなど、超高齢社会における充実した医療提供体制の構築に取り組んでいる。

（３）附属学校に関する目標

附属学校園は、社会のニーズに対応した幼児・児童・生徒の人間形成及び学力向上を目指すこと、また、学部及び大学院における教育研究との有機的な協力関係の下、研究開発・教育実習等に取り組むとともに、地域における教育研究に関する先導的な役割を果たし、優れた教員養成に寄与することを目標としている。

大学・学部との連携については、附属学校を活用した先導的なカリキュラムや学習指導法の開発・実証的評価に関わる連携研究等を促進し相互が組織的に協力する体制のもと実践を行い、地域の指導的・モデル的役割を果たすなどの成果を上げている。

＜特記すべき点＞

（優れた点）

○ 大学と連携した研究体制の確立と実践

教育学部教員が研究代表者となり、各附属学校園の教諭が連携・協力して行う教育実践・研究等を推進する教育支援ステーションを設置し、附属学校を活用した先導的なカリキュラムや学習指導法の開発･実証的評価に関わる連携研究等を促進している。また、これらの研究成果を「連携研究成果報告書」として地域の行政・教育機関に還元し、地域の指導的・モデル的役割を果たしている。

○ 附属学校を活用した研究計画の立案・実施

学校を中核として地域社会や家庭のもとに包括的に進める総合的な健康づくりを行う「ヘルス・プロモーティング・スクールプロジェクト」に関する取組を、平成22年度より大学・学部と附属学校園が協力して行っており、附属幼稚園では、教育学部幼児教育教室と協同して、ヘルス・プロモーティング・スクール（HPS）としての幼稚園の構築のための実践的な取組を行っている。

附属小学校では、各教科で学部教員と連携して教材開発等を行い、特に生活科では学部教員が附属小学校に定期的に来校し授業を行うとともに、附属小学校の教員は授業や単元についての監督を受けている。また、人権教育の一環として、２、５、６年生及び全校の希望する保護者を対象に、様々な暴力から自分を守るための人権教育プログラムであるCAP（Child AssaultPrevention）の実践を行っている。

Ⅱ．業務運営・財務内容等の状況

＜評価結果の概況＞

	非常に優れている	良　好	おおむね良好	不十分	重大な改善事項
（１）業務運営の改善及び効率化			○		
（２）財務内容の改善		○			
（３）自己点検・評価及び情報提供		○			
（４）その他業務運営			○		

（１）業務運営の改善及び効率化に関する目標

①組織運営の改善、②事務等の効率化・合理化

【評定】中期目標の達成状況がおおむね良好である

（理由）　中期計画の記載 14 事項中 13 事項が「中期計画を上回って実施している」又は「中期計画を十分に実施している」と認められるが、1 事項について「中期計画を十分には実施していない」と認められること等を総合的に勘案したことによる。（「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定された計画（３事項）についてはプロセスや内容等も評価）

＜特記すべき点＞

（優れた点）

○ 学長主導による基本方針の策定と運営体制の強化

「千葉大学のビジョン」及び学長の基本方針である「TOKUHISA PLAN」を策定（平成27年度）し、教職員に提示し部局の教職員と定期的な討論会を実施するなど、構成員一丸となった大学運営に取り組んでいる。また、大学が直面する課題ごとに担当副学長を配置し、学長の全学的なリーダーシップをさらに強化しており、全学的な入試改革において、入試担当副学長が中心となり、大学の教育理念・目標に見合う優秀な学生の獲得や受験ブランドの向上のため、個別学力検査を重視した選抜方法への転換を図ることとしたほか、英語の外部検定試験の活用拡大の方針を決定している。

○ テニュアトラック制の普及・定着

テニュアトラック教員に対して、初期の教育研究活動の支援や研究推進の助成及びセミナー開催の支援を行うとともに、「テニュアトラック国際シンポジウム」を開催（平成24・26年度）するなど、テニュアトラック制度及びテニュアトラック教員の認知度の向上を図っている。この結果、テニュアトラック教員の採用は、第１期中期目標期間５部局11名から第２期中期目標期間10部局33名と増加し、さらに15名（うち学内12名）がテニュアポストを獲得している。

○ ３大学革新予防医学共同大学院の設置

金沢大学及び長崎大学との間で、それぞれの強み、特色を生かした予防医学分野の共同大学院の設置に向けて、基本理念と構想、入学者受入方針、教育課程編成方針及び学位授与方針を作成（平成25年度）し、大学の特色を相乗的に組み合わせた体系的なカリキュラムを構築している。また、遠隔講義システムやウェブネットワークを活用した関連設備の試行準備（仮想教室の設置）を実施しているほか、共同大学院における海外教育プログラムである海外フィールド実習を見据え、世界保健機関（WHO）における教員・学生研修を試行的に実施している。平成27年度には、先進予防医学共同専攻の設置計画を決定し、平成28年度入学者選抜を実施している。

○ 次世代対応型医療人育成と「治療学」拠点形成

亥鼻キャンパス改革・機能強化構想の司令塔となる「未来医療教育研究機構」を設置（平成26年度）し、次世代対応型医療人育成と「治療学」の拠点とするとともに、医薬バイオ分野の知的財産業務も担うこととしている。平成27年度には体制を強化した結果、特許出願件数が平成26年度の２件から平成27年度の19件に増加している。また、医学研究院、薬学研究院及び看護学研究科に設置されるセンター、研究部門、講座の再編整備等を行い、治療学推進のための教育研究基盤を整備している。

（改善すべき点）

（法人による自己評価と評価委員会の評価が異なる事項）

○ 中期計画の未達成

「教職員の評価を適切に実施する。また、教職員の能力や実績を適切な処遇に結び付ける制度を検証し、改善、実施する。（実績報告書52頁・中期計画【66】）」については、教員の評価において、対象職種を拡大し自己啓発改善に結び付けているが、処遇にまで結び付けていないことから、中期計画を十分に実施していないものと認められる。

（２）財務内容の改善に関する目標

①外部研究資金、寄附金その他の自己収入の増加、②経費の抑制、③資産の運用管理の改善

【評定】中期目標の達成状況が良好である

（理由）　中期計画の記載６事項すべてが「中期計画を上回って実施している」又は「中期計画を十分に実施している」と認められるとともに、下記の状況等を総合的に勘案したことによる。

＜特記すべき点＞
（優れた点）
○ 財務データの分析と活用

「千葉大学ファイナンシャルレポート」を作成し、ウェブサイトに掲載し、広く周知を図っている。また、財務分析の結果について、教育経費比率を同規模大学と比較し低比率となっていることから、先導的教育モデルとなり得る取組を支援するなど、学長裁量経費等において教育関係事項へ配分を重点的に行うとともに、研究活動に間接的に必要となっている経費を分析し、共同研究の間接経費比率を10%から30%に改めることを決定するなど、学内予算配分に活用している。

（３）自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標

①評価の充実、②情報公開や情報発信等の推進

【評定】中期目標の達成状況が良好である
（理由）　中期計画の記載２事項すべてが「中期計画を上回って実施している」又は「中期計画を十分に実施している」と認められるとともに、下記の状況等を総合的に勘案したことによる。

＜特記すべき点＞
（優れた点）
○ 国際通用性のある医学教育を推進するための質保証の取組

医学部が日本医学教育認証評議会（JACME）による外部評価を受審し、カリキュラムの国際通用性の検証を行っている。なお、JACMEによる外部評価において、新しい教育システムの構築等、不断の教育改善、課題解決型学習、チーム基盤型学習の採用、臨床実習での診療参加型の実践等、先導的取組が評価されている。また、施設の老朽化によりカリキュラムの実施に支障を来しているとの指摘事項に対して、平成27年度学長裁量経費により自習室等を改修して室内スペースを拡張し、学習に集中しやすい自習環境を整備するなど、評価結果を踏まえた改善に取り組んでいる。

○ 戦略的広報活動の推進

積極的な広報活動の推進や緊急事態における情報の迅速な発信等を行うため、①広報に対する意識（広報マインド）の醸成、②正確かつ適切な情報発信、③効果的な広報活動の推進、④統一的な広報活動の推進、を柱とする広報基本方針を策定（平成27年度）している。また、同基本方針に基づき、広報に関する必要な基礎的知識の習得及び広報マインドの醸成を目的とした事務職員向け広報研修を実施している。この他、大学にゆかりのある各界の著名人や卒業生を通じて、大学の魅力を広く発信することでイメージアップを図るために、「千葉大学ジェネラルサポーター制度」を創設（平成24年度）し、地域、官公庁等での講演等において大学のPR及び支援の促進を図っている。これらの体制の下、大学のブランド力の確立及び知名度の向上にむけた一体的な広報活動や積極的な入試広報活動を行い、成果の一つとして平成28年度一般入試における志願者数が大幅に増加し国立大学中１位となっている。

（４）その他業務運営に関する重要目標

①施設設備の整備・活用等、②安全管理、③法令遵守

【評定】中期目標の達成状況がおおむね良好である

（理由）　中期計画の記載６事項すべてが「中期計画を上回って実施している」又は「中期計画を十分に実施している」と認められるが、過年度評価において複数回指摘された事項があったこと等を総合的に勘案したことによる。

＜特記すべき点＞

（優れた点）

○ 「千葉大学方式」による環境マネジメントシステムの構築と展開

学生が実務実習という形で教職員と協働で大学の環境マネジメントシステムに参画し、主体的に活動しており、大学のノウハウが地域へも広がっている。これらの取組が外部からも評価され、環境経営の取組を表彰する「日本環境経営大賞」の環境経営パール大賞（環境経営部門の最優秀賞）の受賞をはじめ、数多くの賞を受賞しているほか、エネルギーマネジメントシステムISO50001認証取得（平成25年度）にもつながっている。

（改善すべき点）

○ 過年度評価において複数回指摘された事項

個人情報の不適切な管理（平成24～26年度評価）について、評価委員会が課題として指摘していることから、現在改善に向けた取組は実施されているものの、引き続き再発防止と情報セキュリティマネジメントの強化に向けた積極的な取組を実施することが求められる。

別　紙

「戦略性が高く意欲的な目標・計画」の取組状況について

○ 主体的な学びを通じて課題探求能力を備えた「考える学生」を育成することを目指した計画

平成23年度にアクティブ・ラーニング・スペース、ティーチング・ハブ、コンテンツ・ラボの３つの機能を備えたアカデミック・リンク・センターを設置し、すべての学部・研究科（学府）でアクティブ・ラーニングを取り入れた授業を実施している。学生アンケートでは、１日の授業外学習時間が３時間以上と答えた学生が平成20年度の7.2%から平成24年度の11.6%へ増加している。

○ 金沢大学及び長崎大学との間で、それぞれの強み、特色を生かした予防医学分野の共同大学院の設置に向けた連携を推進する計画

共同大学院の基本理念と構想、入学者受入方針、教育課程編成方針及び学位授与方針を作成し、大学の特色を相乗的に組み合わせた体系的なカリキュラムを構築している。また、遠隔講義システムやウェブネットワークを活用した関連設備の試行準備（仮想教室の設置）を実施しているほか、共同大学院における海外教育プログラムである海外フィールド実習を見据え、WHO（世界保健機関）における教員・学生研修を試行的に実施し、平成27年度には平成28年度入学者選抜を実施している。

○ 医療系３学部（医学・薬学・看護学）と附属病院が結集した亥鼻（いのはな）キャンパスにおいて、次世代の多様なニーズに応える医療人を総合的に育成するため、司令塔となる「未来医療教育研究機構」を平成26年度に設置するとともに、既存のセンターや研究部門、講座の再編を行うなど教育研究組織を整備する計画

亥鼻キャンパス改革・機能強化構想の司令塔となる「未来医療教育研究機構」を設置し、次世代対応型医療人育成と「治療学」の拠点とするとともに、医薬バイオ分野の知的財産業務も担うこととしている。また、医学研究院、薬学研究院及び看護学研究科に設置されるセンター、研究部門、講座の再編整備等を行い、治療学推進のための教育研究基盤を整備している。

○ グローバル千葉大学の新生－Rising Chiba University－構想の実現に向け、授業科目ナンバリングの導入、「国際日本学」の必修化によるカリキュラムの見直し、ASEAN大学ネットワーク（AUN）との連携推進による共同学習プログラムの開発を行うとともに、入学定員・教員等の学内資源の再配分による新学部の設置準備を行う計画

千葉大学が参画している国立六大学連携コンソーシアム国際連携機構ではAUNと包括交流協定を締結し、大学連合間で交流しているほか、日本人学生と留学生の共同学習プログラム「グローバル・スタディ・プログラム」として新たに２つのプログラムを開発している。